

保忠と柏木の死

藤河家 利 昭

柏木卷末、一条宮を訪れた夕霧は柏木を悼んで「右將軍が塚に草はじめて青し」と口ずさむ。続けて「それもと近き世のことなれば、さまざまに近う遠う、心乱るやうなりし世の中に、……」（二六三）（注一）と有為の青年の死が惜しまれる。先の詩句に古注は紀在昌（大内記・儒者）が藤原時平息右大将保忠を悼んで作った「天与善人吾不信、右將軍墓草初秋」の詩を挙げ、時節を合せて「秋」を「青」に改めたとする。保忠の死は承平六年（九三六）

七月である。ここに保忠のことが引合いに出されたのは詩の引用（殊に柏木の衛門の督という官名が「右將軍」（唐名の右金吾將軍）に一致する）の關係からだけであろうか。右の文からすれば保忠の死も柏木とともに「心乱るやうなりし世の中」の出来事の一つである。従つて保忠も当時の人々に惜しまれる程の人物であつて、それに比べて「一際惜しまれる柏木の死があつたのではないか。保忠の事跡を辿つてみると稗の有職家という点でむしろ柏木自身を思わせるものがある。作者はここで保忠に擬えたことを仄めかしたと言えようか。さらに古注に従えば、柏木の死には保忠が物の怪に取り憑かれて死んだことが比せられていたようである。これをもとにして柏木の死に至る情況がどのように虚構されているかを考え

る。殊に、従来柏木は自らの不安がつくり出した幻影に替えて死に至つたという解釈（注二）がなされている。ここで改めて柏木の源氏に対する畏怖の實質は何か、それに関して女三宮を出家させたもの、彼らの死と生に深く関わる源氏自身のあり方、さらに物の怪出現の意味等の問題について考えて見る。

一

保忠の音楽的方面の才能・有職には卓抜したものがある。第一に彼は雀の名人である。始祖昭宣公基経（父方の祖父）の弟子として二代目を継いでいる（體源抄・統教訓抄・鳳笙師傳相承等）。また秦箏相承血脈にも名を連ねる。これには父の「左大臣時平」の名も見える。時平は延喜七年正月三日の仁和寺朝覲行幸に際して宇多法皇から和琴を授かつて兩三声ほど弾いている。これは法皇が幼少の時から見なれた円城寺の和琴で秀れたものであるという仰せがあつたのである（扶桑略記）。彼は和琴の上手でもあつたのだろう。保忠の弟敦忠（三十六歌仙の一人）も「精・絲竹、其能絶倫」（二十一代集才子傳）と評されるように管絃の道に秀れていた（大鏡）。

醍醐天皇から和琴を伝えた（和琴血脈・河海抄）他、笛と琵琶の名人でもあった（河海抄）。彼らの甥（母時平女）には朱雀門で鬼から笛の名器を得たという伝説（十訓抄）等で著名な博雅三位がいる。保忠のこの方面の素養を物語るものであろう。

彼の音楽の才能は已に少年の時から現われていた。彼は天皇の前に召されて笙を吹く。延喜五年（九〇五）一月二十二日、彼が十四才の時であり、この年の十一月に元服する。

召保忠令吹笙。曲調頗堪聽。因賜橘皮笙。是故太政大臣昭宣公弱冠時。承和天皇為令學習所給也。寬平中以「其名物」而獻之。其後為三宮陽殿笙。令尋舊意以賜之。（醍醐天皇御記）

彼の曲調は素晴らしかったので、昭宣公が仁明天皇から賜わり後に宜陽殿の物になったという由緒ある名器を与えられる（これは恰も横笛巻の、柏木が少年の時から格別の音を吹き立てたので式部卿の宮の萩の宴で陽成院から伝わる笛を与えられたという由来を思わせる）。

延喜十七年（九一七）三月六日の常寧殿の花の宴、二十六才の時である。

命實頼令吹笙。令二兩侍臣唱歌。臨昏還清涼殿。坐東北廂。參議保忠朝臣侍殿上。桜下施筵。

宴は清涼殿に還って行われる。保忠が殿上に侍している。桜の下に文人達を召して「春夜甌桜花」の題で絶句を賦させる。読詩と唱歌があり、やがて楽が始まる。箏、篳篥、琵琶が弾かれる中に、

保忠朝臣時々彈琴吹笙。夜深給保忠朝臣御衣侍臣絹。

（醍醐天皇御記）

彼が御衣を賜わったのは琴と笙を奏したためだけではない。あるう。侍臣と共に祿を賜わっていることから見れば、先の叙述からも言えるようにこの宴の楽の指図をしたものと考えられる。

延長四年（九二六）二月十七日の清涼殿の花の宴、三十五才の時である。貞真親王、藤原仲平の出席があり、文人に献題させ探詢が始まる。酒肴があつて「中納言藤原朝臣參入。仰令探韻」。其後仰召樂所管絃者四五人。令奏音聲以助韻吟。」という記述のように保忠が楽を指図したのであろう。読詩、講が終つて管絃の遊びが夜遅くまで続けられる。親王が箏、中納言保忠が琵琶、帝が和琴を弾く。丑刻に及んで親王と保忠に御衣、文人に綿を賜わる（御記）。この花の宴は延喜帝晩年のことでもあり、後世「めでたかりける事」（古今著聞集）として言い伝える。河海抄は花の宴の准拠に先の二つの例を引く。いずれも保忠は楽の指図をしたと考えられるし、楽器を奏することでも才を發揮した。帝の覚えも厚く彼の並み並みならぬ才覚を思わせるのである。

延喜十六年（九一六）三月五日、宇多法皇五十賀の試楽が行われた。

試楽。吾即二床子。時未一剋也。樂行事參議朝臣等率樂人參二着座云々。

次いで七日、天皇の朱雀院行幸がある。

皇太子諸親王侍宴行酒奏樂。參議藤保忠為樂行事。左少將藤忠房副之。

（御記）

河海抄は紅葉賀の准拠として最初にこの例を挙げる。さらに「宰相二人左衛門の督、右衛門督、左右の樂のこと行ふ」に注して「參議御賀樂行事。亭子法皇五十御賀樂行事保忠卿于時參議右大弁」とす

る。蓋し特別の例だつたのであろう。朱雀院御賀の行幸は延喜の時
代に限って法皇四十賀とこの時と二回しか行われていない(注3)。
この一代の盛儀における樂行事としての保忠の力量を思うべきであ
らう。時に彼は二十五才である。この出来事は若くして時の有職の
彼の名を高からしめたであらう。

延喜二十年(九二〇)冬十月の清涼殿の舞樂はまた彼の面目を施
している。

召_レ雅樂寮人於清涼殿前。奏_レ樂覽_レ舞。群臣候_レ焉。參議藤保
忠奉_レ勅奏_レ傾盃樂、採桑老、蘇志摩、林歌、蘇莫者、甘州、胡飲
酒、酣醉樂等、船木氏有_レ着_レ鷹飼裝束、臂_レ鷹舞_レ放鷹樂、新羅
琴師船良實着_レ大飼裝束_レ從_レ之。氏有_レ鬘_レ袖放_レ鷹捕_レ小鳥。見者
驚_レ歎_レ之。保忠着_レ小鳥於菊枝。立_レ階前奏_レ曰船木氏獻_レ御贊
也。及充_レ御厨。

(御記)

若聞集は「八条大将(注4)保忠勅を受けて舞を奏する事」として
伝える。彼は日頃奏せられない舞を数多く奏した。そして舞の裝束
をも調じたのである。また船木氏有は放鷹樂を舞い、鷹を放つて小
鳥を捕えた。これは驚嘆に価する趣向であった。保忠は捕えた小鳥
を木の枝に付けて階前に立てて奏する(河海抄は藤裏葉卷の六条院
行幸の時の叙述に「捕鳥奏階下」として保忠の例を挙げる)。こう
して彼は舞についての深い造詣を余すところなく表わした。この時
やと二十九才である。この出来事の珍しさとともに彼の名も記憶
されたことであらう(注5)。

若葉下卷末、源氏はどんな事でも「ゆゑあるべき折節」には柏木
を格別に召して相談していたという。しかるにこの朱雀院五十の賀
の試案にも参加しないのは「いと采なくさうさうしかるべき」こと

であり、人も怪しむことであるからと思つて呼ぶ。源氏は院に童舞
を御覧に入れようとし、院は特にこの方面に通じているので、柏木に
舞の童の用意・心ばえを加えることを頼む。柏木は夕霧の用意した
樂人舞人の裝束の事などに更に手を加え「いとどくはしき心しらひ
添ふも、げにこの道はいと深き人にぞものし給ふる」(二二六)
と深い造詣を示す。そのためであらう、「深きかどかどしさを加えて、
めづらかに舞ひ給ふ」(二二七)と成功する。しかしこれ以前に彼
が舞の後見をしたという叙述はない。彼は父大臣の手を弾き伝えて
帝の師も勤める和琴の上手である。折々の六条院の遊びでその才は
示される(篝火・梅枝卷)が、殊に若葉上卷の源氏四十の賀におけ
る彼の和琴は父の手を立派に伝えて人々を感動させた(四七)。そ
の他には、玉鬘に送った懸想文の見所あること、源氏四十の賀で夕
霧と共に入綾を舞うこと、並ぶ人もなかつたとされる六条院での蹴
鞠(二〇九)等がある。

ここに至つて柏木像は有職家としての新しい面をもつた。彼の死
後、帝が管絃の遊びなどの折ごとに彼を偲び、「あはれ衙門の督の」
という口癖を何につけても言わぬ人が無かつたこと(二六四)、或
いは鈴虫宴において源氏が「おほやけわたくし、物の折ふしにはほ
ひ亡せたる心地こそすれ。花鳥の色にも音にも思ひわきまへ、いふ
かひある方のいとうるさかりしものを」(二九三)と哀惜すること
は彼の有職家としての面を受けている。彼が死に際して新しい面を
もつて登場することには彼の死を一層哀惜されるものとする効果が
考えられよう。それと同時に殊に実在の人物が想起されることによ
る効果も考えられるのではあるまいか。朱雀院五十の賀に舞の後見
をする柏木の役割は、史実の朱雀院五十の賀の樂行事保忠を思わせ

る。いずれも若く時の有職である(注6)。また「むべむべしき方をばさるものにて、あやしう情をたてたる人にぞものし給ひければ、さしもあるまじきおほやけ人、女房などの年古めきたるどもさへ、恋ひ悲しみ聞ゆる」(二六四)という柏木の性格も新しい面である。これに対しても保忠のことが考えられるように思われる。保忠は初めにあげたように「天与_二善人_一吾不_レ信」と惜しまれた。「善人」とは史記に伯夷叔齊の如き人物に比せられている。彼は徳を具えた人であったのかも知れない。また「賢人大將」(公卿補任、江談抄には「賢大將」とも言われていた。或いは大鏡が伝える、身を温めるためにもっていた餅をぬるくなると車副に分け与えたという話も彼の性格を物語るものかも知れない(注7)。

こうして初めの「心乱るやうなりし世の中」の出来事とは一代の有職家としての(少なくとも人々から惜しまれる)保忠の死を意味していたと考える。或いは柏木を保忠に比した作者の意図が「右將軍」に仄めかされたとも考えられる。そしてこのことは柏木の死に保忠が物の怪に取り憑かれて死んだことが比せられるということと関わっているのではなからうか。つまり死に際しての柏木像にはある程度まとまりをもった保忠の像が重なり合うのである。

二

柏木巻には保忠を思わせる場面がもう一つある。病重くなって父大臣の葛城山から請じた聖が「長高やかに、まがしつべたましくて、荒らかにおどろおどろしく陀羅尼誦む」のを「いであな憎や。罪の深き身にやあらむ、陀羅尼の声高きは、いと気恐しくて、いよ

いよ死ぬべくこそ覚ゆれ」(二三七)と恐れるところである。これを花鳥余情は世戀物語を引いて「時平公三男敦忠中納言こちわづらひける時薬師経をよませ侍るに十二神のうちくびら(宮毘羅)大將といふをきよて我くびをく、れといふぞときよてそのまゝ死たまひぬおくびやうの人にひつたへたり」と説く。岷江入楚も指摘するようにこれは保忠のことである(注8)。この事件と右將軍の事から岷江入楚は「柏木保忠卿に思ひ寄せてかけるかと覚ゆ」という。大鏡によれば保忠は「こはきものゝ氣にとりこめられ給へる人」であった。平生から菅公の靈に取り憑かれていたのに経を「あやしうちあげ」たものだから「臆病にやがてたえいり給」という。そして「ものはおりふしのことだまも侍こと也」と評する。何でもない言葉でも時によっては不思議な力をもつこともあるというのである。柏木の場合は単なる臆病ではなく、陀羅尼を自らの罪と結びつけて恐れている。また聖を長高く、目付が険しく……というふうには柏木をよけい恐れさせるものとして粉飾されている。が、大鏡の、物の怪に取り憑かれている人に言葉が不思議に作用して死に至らせたという解釈は興味がある。

保忠が物の怪に取り憑かれたと思ったのはその臆病のせいだけではない(注9)。大鏡等によれば彼だけでなく時平の一族は道真の怨靈に怯えていた。三男敦忠は生前「われはいのちみぢかきぞうなり。かならずしなんず」と言っていた。二男頼忠は道真を昼夜に念じ儉約生活をしたので彼だけは長生きできた。その他は時平以下、保忠、敦忠、女の京極御息所、孫の春宮(慶頼王)等が次々亡くなったという。道真の死は延喜三年(九〇三)で保忠十二才の時である。それから六年して延喜九年には父時平が三十九才で亡くなる

(注10)。延長元年(九二三)三月二十一日には皇太子保明親王(文彦太子、醍醐天皇と時平父基経女穩子との御子、保忠には従兄弟)が二十一才で亡くなる。日本紀略は「天下庶人莫不悲泣、其声如雷、举世云菅師靈魂、宿忿所為也」とその死を悼む。その他、内裏が度々焼け「つくるともまたもやけなんすがはらや」の歌が裏板にあったとか、菅公が北野の神となってからも雷となって清涼殿に落ちかけたとかの話も伝えられる。これらは菅公の怨霊の存在が人々に信じられていたことを示している。まして当事者にはより現実的だったであろう。従って菅公の物の怪の存在は客観性をもっていたと言つてよい。

柏木の死を決定的にしたのは彼が源氏に呼ばれて止むなく朱雀院五十の賀の試案に出て行ったときである。源氏が我身の老から「さりともしばしならむ。さかさまにゆかぬ年月よ。老はえのがれぬわざなり」と空酔をしながら皮肉を言つて「うち見やりたまふに、彼は「いとど胸つぶれ」、帰りながらも「いといたく惑ひて」そのまゝ重病になつてしまふ(二一九)。これは源氏がこのような結果を全く予測しなかつた(彼は「いと口惜しきわざなりと思しおどろきて」(二二二)父大臣に見舞いをする)ことで柏木の恐れは確かにその主観にのみ止まると言えよう。しかし彼は歸つて「いと然言ふばかり、臆すべき心弱さとは覚えぬを、いふかひなくもありけるかな」と自らの臆病を不甲斐ないとまで思つている(二一九)。今までは源氏に臆するところがあつてはならないと努めようと思へた、が今は力尽きたという口吻である。彼は自分を威圧する源氏の手を身をもつて知らねばならなかつた。それなくしてすぐ後の「今はと別れ奉るべき門出」という一条宮から父邸に移るときの落葉宮

との今生の別れ、そして柏木卷冒頭の「つひになほ世に立ちまふべくも覚えぬ」という自己半生の感懐へと続く事態の進行はあり得ない。

彼にとつて源氏の威光は決して虚像などではない。女三宮の許に彼を導いた侍従に向つて、このような大それた過ちをひき起こした例が昔にもなくはないと言ひながら、「なほけはひわづらはしう、かの御心に、かかる咎を知られ奉りて、世にながらへむ事もいと眩く覚ゆるは、げに異なる御光なるべし」(二二八)と自らの体験の結果として源氏の威光の絶大さを知り、それを洩らしている。彼の判断は事の真相を知る侍従に語られることによつて客観性が与えられているかのようである。死の直前にも夕霧に向つて、源氏に事の違目があつて病になり、やはり同じ経緯で世に生き永らえることもできなくなつたと語る。そしてこのままでは後世の妨げにもなるから勘事を許されるように言ひ遺している(二四五)。夕霧には彼の意趣が探り得ないがそれはあくまで彼の過ちの性質であつて彼が今際の際まで氣遣う源氏の威光ではない。事の真相さえ明白になれば柏木が源氏を恐れて死に至つた経緯はいちいち首肯されるのである。源氏の威光はその意識如何に関わらず厳然として存在し続ける。人間を離れたところでも權威や威光はその慣習によつて生き続ける。「いはけなうはべし時より、深く頼み申す心の侍りし」(二四五)という柏木には「年頃、まめごとにもあだごとにも、召しまつはし」(二〇〇)てくれたという源氏との親密な関係が断たれては自らの社会的立場はない。彼は人一倍の野心家の筈であつた(二二三)。反面少しでも人に欠点をつけられまいとする小心とも言うべきところがあつたが(二二〇)。試案の日以来の彼は源氏よりもは

るかに冷静にその威光を受けとめ自らの死と対座しているようである。彼は自己の妄想のつくり出した幻影の前に恐懼していたのではない、彼にとって畏怖は今やぬきさらぬ実質をもっていた。

已に彼は女三宮への物思いに沈んでいた時から、源氏を見ると「気恐しく眩く、かかる心はあるべきものか、……おほけなき事」(一一〇)と恐しさに居竦められる自分を知って思い屈していたのである。そして密会の直後から彼はこの過ちに身も世もあらず懊惱し「世にあらむ事こそ眩くなりぬれと、恐しくそらはづかしき心地して」出歩くこともしない。彼はこれは帝の御妻を犯すほどの罪にはあたらないとは思ふものの、源氏に睨まれることをこの上なく恐れ恥かしく思うのである(一一九)。遂に密事が露頭した時もこれまでの源氏との関係を思って、さして重い罪に当るとは思われぬが、「身の徒になりぬる心地」がするので初めに抱いた危懼の通りになったと嘆く(一二〇)。ここから試楽の日の源氏と目を合せる場面に続くのである。こうして見ると柏木の初めに抱いた畏怖が次第に実質をもち、それに応じて彼が確実に死への道を歩む、その過程を作者は段階的に進めていると言えよう。が通して言えるのは彼の畏怖が「恐しく」「眩く」「恥かしき」等に示されるように、観念によってでなく身をもって受けとめられる性質のものであることである。密会の直後も「いとあるまじき事といふ中にも、むくつべく思ゆれば」(一七八)というように肉体によってこの事を厭わしく思う。彼は畏怖の対象を掴み得ているのではない、それかと言つて勝手に妄想しているのでもない。全くそれに支配されていると言ふべきであろう。このことは彼が自己の判断を喪失していることを意味しない。彼は自分の過ちを先づ罪の観念で計量しようとして

いる、しかもそれを看過する。ただ動願するばかりならどんなことでも彼を動願させることはできる。すなわち彼の思考は客観性を志向しているのである。にもかかわらず源氏の前には身をもって畏怖する自分を知る。罪ということだけなら何も死ぬにはあたらないと作者は言外に仄かしているかのようである。これに対して源氏は昔にも帝の御妻を犯す例もあつたがそれは必ずしも帝寵が厚くない場合である、自分は紫上をおいて宮を大事にしているのに自分をさしおいてと思う(一九七)。柏木が源氏の怒りを問題にし、源氏は柏木の罪そのものを問題にする。この点にずれは生じが二人の置かれた位置からしてこれは当然のことであろう。むしろ源氏が柏木を「おほけなき人」と見ることは柏木の恐れのよつて来るところと一致している。柏木はたとえ六条院における女三宮の地位を知らなかつたにせよ、この事件が源氏に対して「おほけなき事」(一二〇)であることは初めから知っていた。源氏自身今にして藤壺との密通を故院の前に「思へばその世の事こそは、いと恐しくあるまじき過なりけれ」(一九八)と思う。まかり間違えば源氏も柏木と同じ道を歩んだであろうことがはっきりしている。柏木の畏怖は彼の内面のみで自己増殖されたなどというものではない。それは初めから変らなかつたし身をもってする確かさがあつた。ただ局面の展開によつてその度を強めていっただけである。そしてそれが死に結びつくには源氏の些細な言動(客観的には)でよかつた。恰も物の怪に取り憑かれた保忠が何でもないお経の文句で絶え入つたというようにである。

源氏と目を合せて重病になつてからの柏木には死を見据えた確かさがある。今までの彼の畏怖が確とした根拠に基いていたことを証

していよう。しかしその死を見据えることの余りの確かさはそれゆえに一つの飛躍を感じさせる。彼が自分の病について侍従に語った「深き過もなきに、見合せ奉りし夕の程より、やがてかき乱り、惑ひそめにし魂の、身にもかへらずなりにし」(二二八)とか、夕霧に語った「御目尻を見奉り侍りて、いとど世にながらへむ事もはばかり多う覚えなり侍りて、あぢきなう思う給へしに、心のさわぎそめて、かくしづまらずなりぬるになむ」(二四五)という説明は、にもかかわらず彼が重病になった必然性が薄いように思わせる。彼は自らの惑乱をおさえられない、しかもそれを自覚している。余りに畏怖が確かさをもつためそれから生じた惑乱を自嘲の気味をもって眺めていると言えようか。惑乱は自らの力を越えたものである。自らのつくり出したものによって惑乱すると考えるより、彼の力の及ばないものに支配されていると考える方がこの時代にあつてはより現実的なのだと思う。彼が死に至つた内面的必然性はさして重要ではない。畏怖する人がその畏怖するものと目を見合せるという事実がそれに肩代りし得るのである。

にもかかわらず柏木の病は源氏の全く予期せぬことであつた。彼は遂に自分の言動が柏木にどんな影響を及ぼしたのか顧みることはないようである。近代の小説ならばこんなことはあり得ないだろう。ただ横笛巻末に、夕霧の不審に答えて「しか人のうらみとまるばかりの気色は、何のついでにか漏り出でけむと、自らもえ思ひ出でずなむ」(二八四)とぼかしている。それにあたる事実を強いて捜せばやはり目を見合せた時以外はない。その時の源氏の態度を作者は「いみじきことも目にとまらぬ心地する人をしも、さしわきて空酔をしつゝかくのたまふ」(二一八)と評する。いくら酔いに紛

れた源氏の老いの自嘲であるといつてもこれが柏木に応えない筈はないという口ぶりである。作者の側から描かれるだけで源氏自身どう思つてこんな事をしたのか分らない。彼は柏木を呼ぶ前に「見むにはまたわが心もただならずやと思し返されつ」長く呼ばなかつた(二二二)。柏木が病をおして出て来ると事件の罪を許しがたく思うものの「さりげなくいとなつかしく」語らい殊更自制していた(二二三)。童舞が花やかに終えられた後の言動は意外という他はない。しかし彼の心中が空白であることによつてそれが彼の人格を越えたことだつたことを証している。これは唯ならぬこともと思つた予感をさえも越えたことであつた。同時に今までの源氏の忍耐からして最低限のことと思わせる面もあるのである。従つて彼は柏木の自滅に関わり得ない。五十日の薫を見ての「さばかり思ひあがり、およづけたりし身を、心もて失ひつるよ」(二五一)という柏木の運命への哀憐は、柏木の死が誰とも関わらぬところにあつたための哀憐である。柏木のためにとりわけ誦経や布施をしたり(二八五)、何につけても心得のあつた柏木を哀惜する源氏の姿には、僅かの我にもあらぬ気色が洩れ出たとしてもそれを償つて余りあるものがある。試案の日のことは彼の与り知らぬことであつた。恰も柏木の惑乱がどうすることもできないものであつたようにである。

三

次に女三宮の出家に至る経緯を見よう。宮はならわぬお産の恐しさにつけても今度の事で我身が辛いので「さばれ、このついでにも死なばや」とまで思う。そうしたとき源氏が人目を飾つてはいるが

生れたばかりの薫を特に見ようとしないうので老女房が非難がましい口をきく。それを片耳に聞いた宮は「さのみこそは、思し隔つることもまさらめと、うらめしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ」(二三二)という。この意志が堅いことはあの心幼い宮が「常の御けはひよりはいとおとなびて」(二三三)出家を申し出ていることでわかる。事実、源氏は薫の五十日を迎えて初めて「今しも、やむごとなく限なきさまに」扱うのである(二四八)。もし宮が出家しなければいくら人目を飾っても源氏の蟠りは益々目についたであろう。産養の時に源氏は表向きは立派な祝をするが心の中には思うところがあって大してもはやしもしない(二三二)。しかし宮に源氏の氣配が察せられたとしてもそれはあくまで直接的にはない。出家の事も、彼は人目をうまく飾ったがそれでも足りないところが間接的に宮に伝わったのである。彼は宮の出家の意志を聞いて驚いて止め、それが余りに堅いので「つれなくて、うらめしと思す事もありけるにやと、見奉り給ふに、いとほしうあはれなり」と思う(二三八)。これもまた彼の人格を越えたことであつたと言わねばならない。

事件が発覚してからの源氏と宮との関係だけに限ろう。源氏は宮を思いきろうとするとかえって今までになく恋しさが募ってくる。彼は宮が懐妊しているのでむしろ前にもまして世話をする。が、うちとけて話をするとなると心に隔てが生じるので人目だけを繕って思い悩む。宮の心は苦しい(二〇二)。また朱雀院から宮を氣遣う消息があつたので源氏は自らの老いの愚痴をも交えて「まほにその事とは明し給はねど、つくづく」と教訓する。そして宮が院への返事も手が震えて書けないのを、柏木への返事はこんなに遠慮せずに

通わせているのであろうと「いと憎ければ、よろづのあはれも醒めぬべけれ」と嫉妬する(二二一)。彼は宮の心幼さにつけ入って自分の「さだすぎ」たことを慰藉しているようである。宮の方は思い悩んでいる様を源氏の前に隠そうともしない幼さなのである。源氏はその心安さのゆえに嫉妬をどうしようもなく燃え立たせ、益々残酷になっていくかのようである。彼は宮の出家を驚いて止める一方、このままでは何事にも宮が遠慮するし、「われながらもえ思ひ直すまじう、憂き事うち交りぬべき」ことを人が咎め、院にも憚られるしいっそ出家させてしまおうかと思う(二三四)。これはすぐに否定されるが、これからも宮に辛い仕打ちが生じるであらうことは、自らも予想される打ち消しがたい事実であつた。しかし彼は宮の出家に自分がどんな影響を及ぼしたのかはつきり知ってはいない。彼が宮の心中を思つて「色にも出し給はず」とか「しひても聞え給はず」(二五一)と努めて注意するようになるのは出家以後のことである。

宮の出家の後、六条御息所の物の怪が出現するのはどうしたことであらう。物の怪は、源氏が紫上を取り返したと思つたのが妬ましかつたので宮のところはずつといたという(二四〇)。言うまでもなく女三宮事件の原因は紫上がこの物の怪に憑かれて病になつたことであつた。大朝雄二氏は、この事件は源氏の運命であり、それによつて源氏の理想性の限界が露呈される、またこの場合は「柏木に盗まれた女三宮を物怪のために再度奪はれるという源氏の無力さが示される」(注11)と言われる。私もその通りと思つが、それでも何故物の怪が宮を奪わなければならなかつたかという疑問は依然として残るように思う。宮はなれないお蓮に加えて事件を思い悩み、体が

衰弱していた。従つて物の怪が憑く要因は揃っている。また源氏にとつて宮の出家は今や愛着が募つてきたことだけからしても大きな痛手である。しかし六条御息所の物の怪自体にとつて宮は関係がない。かつて葵上に憑いたのは車争いがもとであつた。紫上や女三宮の場合には本来源氏に憑く筈だつたのであろう。が、紫上の場合でさえ理由は薄いが源氏が二人の睦物語で御息所の性格の欠点を論つたからとあつた(一八四)。源氏自身、宮の出家が物の怪のせいとは少しも思つていない。後に宮の尼姿を見ても「過ぎにし罪ゆるしがたく、……」と柏木を非難している(二七〇)。

宮を出家させることは今や強い愛着を感じている源氏にとつて大きな悲しみである。まだ若く美しい宮の尼姿を見なければならぬのは我身の苦痛である。にもかかわらず宮を出家に追い込んだのは、直接的ではないとしても源氏自身の折々の態度そのものではなかつたか。事実、鈴虫巻に至つて宮の出家を、源氏が人目には交らないが中には不快に思つている様子が明らかで、すっかり交つた気持だから、宮は何とか顔を合すまいとして決心したことだと説明されている(二九〇)。源氏の中には常に許しがたい怒りと嫉妬の情が渦巻いていたのである。私はこの物の怪出現は源氏の罪深さを転嫁する役割を担つていると思う。また彼自身としても宮をみすみす出家させることは忍びがたいことであつた。夕霧から見ても「さりとめゆるし聞え給ふべき事かは」(二五一)と不審がられることだつた。この困難を乗り切るためにも物の怪が必要であつた。こうして物の怪の象徴する嫉妬と源氏が宮に抱いた嫉妬とが深い関わりをもつと思ふのである。紫上に憑いた物の怪については大朝氏のこれが源氏自身の運命であるという見解の他に、紫上の病はもともと自

身の嫉妬に根ざし、それが死霊を呼び出したという見解(注12)等がある。私は物の怪が事件の直後に現われていること、「自らつらし、と思ひ聞えし、心の執念むとまるものなりける」(一八四)という執念を象徴するものであることによつて、これに続く宮の懐妊、柏木の手紙の発見によつてもたらされる源氏の嫉妬の苦悶を予告するものであろうと考へる。横笛・鈴虫巻が柏木・女三宮の後日譚とも言うべきものに当てられ、その終りに御息所の鎮魂がなされるのは物の怪がこの女三宮事件全体を覆うものであることを示す。それは源氏自身の病める部分と関わつているのである。

死を前にしての棄の有職という柏木像には保忠が比せられている。それは柏木の死に、物の怪に憑かれて死んだ保忠の死が下敷きにされたことと関わつていようである。そしてこのことは女三宮に憑いた物の怪と共に源氏自身の罪の緩衝として設定された。これは源氏の理想性を維持するためであつたが、それは全く辛うじて成り立つていたのである。女三宮に対しては栄華を離れた一人の人間の苦悶が覆いがたい。それに比して柏木の場合は最低限に止められている。このことは源氏よりも柏木の側により多く作者の関心があつたためと言えよう。柏木は源氏を恐れて死にながら源氏と殆ど関わらないところにいた。しかも死に至るべき客観的状況は身をもつて知つていた。誰とも関わりたくないところで確実な死を見据へることにむしろ悲劇性はある。そして彼は若く、時の有職であつた。作者が保忠像を借り来るとき、何よりも彼の運命とその一代の有職家としての面に強い関心を払つたに違いないのである。

〔注〕

1 日本古典全書四巻の頁数、以下同じ。

2 石田穰二氏「柏木の死について」(国語と国文学・二八年九月)、深沢三千男氏「女三宮物語の基本構造」(国語国文・三九年十月)等。

3 清水好子氏「紅葉賀」(源氏物語論)

4 梅枝卷薫物合では紫上は「八条の式部卿の御法を傳へて」いる。これは本康親王のことで河海は「一品式部卿、号八条宮、仁明天皇第七皇子……延喜元年薨、高名薫物合也」とする。親王女麻子が保忠の母であり、彼にとって親王は母方の祖父。彼は親王の邸を伝領したのである。彼の芸術的環境の側面である。

5 その他の面でも承平元年四月十六日、「伊勢幣事」の行事(眞信公記)、延長四年九月十一日、「伊勢例幣」の行事(西宮記)を勤める。また承平元年十月二日、勸学院别当となる(公記)。彼の晩年、承平四年三月二十六日、皇太后穩子五十賀の後宴において左右大臣、大納言恒佐卿と共に崑崙を舞う(著聞集)。

6 官位昇進も柏木の右中将が二十(一才(蛩))——保忠二十才(公卿補任)、中納言が三十一(二才(若菜下))——保忠三十二才とほぼ一致する。

7 続古事談には、勅負の佐という者と道で会った時、佐が下馬して礼をしたので保忠は咎めて騎馬のとき以外は礼をしなくてよいと言った。それに答えて佐は相手が誰かわからない時はともかく、わかった以上は礼をするのが当然だと言った。これを保忠は賞めたという。むしろ彼の善良さを感じさせる。

8 敦忠と間違えたのは彼が大和物語や今昔物語にもその名が見えるように著名だからであろう。

9 彼の臆病につながる話は古事談にも「近衛大将騎馬之時」、「桃尻」のため落馬して「耻辱」を受けたとある。

10 彼の死には「青きくちなは」に取り殺されたという話がある(在柄天神縁起)。

11 「源氏物語の構想についての試論」(文芸研究四十年六月)
12 小西甚一氏「苦の世界の人たち」(言語と文芸六一号)

——広島大学大学院学生——